

第1回日本気象学会岡田賞

日本における数値予報の発展と実用化に対する貢献

岸 保 勘 三 郎 (気象研究所)

1949年 Princeton 高級研究所において Charney 博士その他によって発表された数値予報は今や世界の気象界において最も重要な問題の一つになっている。数値予報は気象力学の最も興味ある問題であるのみならず、予報技術に革命的転換を与えようとしている。既にアメリカにおいては1956年5月より実用段階に入っていることは周知の通りである。最近わが国の数値予報の研究は世界の同分野の研究者間において次第に高く評価されつつあり、又一方国内にあっては気象庁において大型の高速電子計算機を設置し数値予報の現業化が実施されようとしている。これはわが国における数値予報の研究者の献身的努力によって得た多くの成果によるところが大きいのである。もとよりこの成果は一人の努力によって得られるものではないが、岸保勘三郎君の基礎並びに実際の両方面における貢献は極めて著しい。

同君は1953年に Princeton 高級研究所に滞在し、Charney 博士その他と共に研究に従事し、その進歩に貢献した。帰国後は基礎的研究を行うとともに、多くの実用問題についても研究グループの中心となり、技術面の研究にも著しい貢献をした。さらに数値予報に関する好著を著わしてこれを紹介し、わが国気象界における数値予報に関する知識水準の向上に寄与するところ大である。

数値予報はその理解と研究には高度の基礎知識を必要とし、一方天気予報への実用を目的とするもので、基礎と実際との密接な連結が特に要求されるものである。同君の貢献はこの要求に完全に答えるものであって、わが国気象学界に貢献するところ極めて顕著である。よって本学会は岸保勘三郎君に第1回日本気象学会岡田賞を贈る次第である。

学 界 消 息

日本学術会議地球物理学研究連絡委員会気象分科会委員候補者の推薦について

首題の件に関し選挙管理委員会から開票の結果の報告がありましたので、下記の通りの順位で15名を推薦致しますから御知らせ致します。

日本学術会議地球物理学研究連絡委員会気象分科会委員候補者

	総投票数	参 考 資 料			総投票数	参 考 資 料	
		獲得票数	白票 他の票数			獲得票数	白票 他の票数
1 山本 義一	533	525	7 1	9 高橋浩一郎	533	175	5
2 正野 重方	〃	521	11 1	10 有住 直介	〃	174	〃
3 島山 久尙	〃	512	11 10	11 伊藤 彌自	〃	143	〃
4 滑川 忠夫	〃	509	23 1	12 岸保勘三郎	〃	142	〃
5 孫野 長治	〃	506	21 6	13 吉武 素二	〃	115	〃
6 和達 清夫	〃	300	5(注)	14 肥沼 寛一	〃	104	〃
7 大谷 東平	〃	265	〃	15 大田 正次	〃	85	〃
8 荒川 秀俊	〃	202	〃				

(注) 6番以下の分は一般の部として26名の推薦者のために票は分散しております。なお白票5のうち3票は倍の10名連記のため不採用となっておりますが、この順位には影響ありません。

月例会のおしらせ

太陽活動と気象現象に関するシンポジウム

日 時 1月31日(金) 13時30分より
場 所 気象庁第一会議室

特 別 講 演

超高層大気と太陽活動 (60分)
古畑正秋(東京天文台)

研 究 発 表

1. オゾン層に関連した問題(序報) (15分)
嘉納宗靖(太陽コロキウム代表)
2. 気球の破裂高度と大気オゾン (25分)
北岡竜海(気象庁)
3. 太陽黒点と偏西風長波の特性 (15分)
荒井 康(気研)
4. 太陽活動度と大気大循環(序報) (15分)
朝倉 正(気研), 片山昭(東管)
5. 太陽活動と気象の長周期変動 (15分)
高橋浩一郎(気研) 牧守真

第6回航空気象シンポジウム

日本気象学会第4分科会 共催
日本航空学会

日 時 昭和33年3月14日(金) 13時より
場 所 気象庁研修所東京教室(千代田区大手町1の7)

講 演 題 目

1. 飛行機の観測による台風の雲と擾乱の分布 (20分)
越智 壘(岩国航測)
2. 太平洋のジェットストリームの解析例 (20分)
杉本 豊(東京航空気)
3. 千歳の霧について (15分)
渡辺礼五, 菊地恒之(千歳航測)
4. 中部太平洋航空路における Optimum Flight
の気象学的考察(第1報) (20分)
光野 一(東京航空気)
5. 北太平洋航空路の Minimal Flight コースに
ついて (20分) 山田直勝(東京航空気)
6. 其の他
追加講演申込者は2月28日までに東京航空気象台
上松清に申込み下さい。